

# ～ベラルーシからヒロシマ・ナガサキ、フクシマを訪ねて～ チェルノブイリ・ヒバクシャの想い



8月に、ベラルーシのミンスクから、「移住者の会」代表のジャンナ・フィロメンコさんが来日されます。私たち「救援関西」は長年にわたって「移住者の会」への支援・交流を続けてきました。

今回のジャンナさんの来日は、原水爆禁止日本国民会議の招聘によるもので、広島・長崎の原水禁大会に参加されます。その後、事故から8年目の福島を再び訪れます。事故から32年にわたるチェルノブイリ・ヒバクシャの想い、また今回、被爆地広島・長崎（被爆二世の方々との交流も予定）と、2回目の福島事故被災地を訪れた感想などもお聞きし、交流を深めたいと思います。そして、ヒロシマ・ナガサキ、チェルノブイリ、フクシマを結んで、核被害者の補償の確立のために、また核被害を繰り返させないために、私たちに何ができるか…ともに考える機会にしたいと思います。多くの方の参加をお待ちしています。

=ジャンナ・フィロメンコさん／「移住者の会」代表=



チェルノブイリ原発から北西40kmのベラルーシ共和国ゴメリ州ナローブリア出身。事故当時、夫と幼い二人の息子と暮らしていた。ナローブリアは高汚染地（福島の「避難区域」と同レベル）だったが、ソ連政府は一般市民も「生涯350ミリシーベルトまでは許容される」（注）との施策をとり、人々は住み続けた。住民運動の結果、「チェルノブイリ法」（1991年）が制定され、同地区は「移住対象地域」となり、首都ミンスクの集合住宅の権利を得て家族で移住。慣れない都会で「ゼロからのスタート」だった。同じような境遇の人々が次第に連絡を取り合い「移住者の会」を結成。

「事故15周年（2001年）」に来日。「30周年（2016年）」には、関西の国際シンポジウムなどに参加し、また福島被災地訪問・交流もされた。欧州各地でも体験を語り「核はコントロールできず、使ってはならない。誤りを繰り返さないで」と訴えている。

[注：国際放射線防護委員会（ICRP）の当時の一般公衆の被ばく限度が年5ミリシーベルトで、その70年分で「生涯350ミリシーベルト」とされた。]

\*日時：8月12日（日） 午後1時半～4時

\*場所：ドーンセンター中会議室 ①

●京阪、地下鉄谷町線「天満橋」駅下車。東1番出口より東へ約350m

\*資料代：700円

主催：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西

問合せ：072-253-4644（いのまた）

0797-74-6091（たなか）

<cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp>

